❶自慢のハウスで娘の莉央ちゃん(左)、優衣ちゃん(右)と撮影❷手のひらいっぱいの自慢の大玉トマト ❸トマトを大切に運ぶ昌史さん❹市場に届く頃には真っ赤になるトマトを収穫する昌史さん ❺笑顔いっぱいでトマトを収穫するめぐみさん

最先端技術を駆使した農業

農業に魅せられて

色鮮やかな赤や緑がいっぱいのビニールハウスの中にトマトを栽培する橘昌史さん。栽培面積は80アールで、両親と妻のめぐみさん、従業員の5人で栽培をしています。

小さい頃から両親が働く姿や手伝いをしていく中で、大変そうだが楽しそうと思い、小学校の卒業文集に書いた将来の夢は農家になること。「農業の魅力に当時から気付いていたんだなあ」と笑顔で話します。

きつい、汚い、儲からないをなくす

農業大学を卒業した後、橘さんは、スイスで1年間農業研修を経験。「視野を広げるために海外で修学したおかげで流通や減農薬栽培、販売、経営について学ぶことができました」と話します。

昨年はトマトの最先端技術を持つオランダで研修を受けるなど意欲的に活動。「効率的なものを取り入れて負担を減らしたい」という思いで仕事に取り組んでいます。

のびのびと仕事ができる

橘　昌史（まさふみ）さん(34)
(鏡町)

結婚を機に保育士から農家になっためぐみさんは「子どもの熱や病気など、急な用事ができたときに休むことができ、自分で仕事の調整がしやすく、仕事と子育ての両立がしやすい」と話します。

ハウス内には受粉のためのハチが２００匹いるが、めぐみさんは「ハチが苦手なので、ネット付きの帽子をかぶって作業しています」と対策はバッチリ。

より良くする気持ちを忘れない

「努力すれば、結果が目に見えるから頑張れる。作物の知識の蓄積や観察を絶やさず、機械のデータも見る。自分がもっている全ての技術を使って安定したおいしさを提供したい」と話します。

「これからも地域の人たちとのつながりを大切にし、海外で学んだことを生かしていきたい。そして地域の先頭に立ち、引っ張っていけるような農家になりたい」と目を輝かせていました。

大地の恵みで描く未来

30年前、八代市の農家人口は約30,000人。4人に1人が農家でした。
現在、約13,000人と農家人口は減ったものの、
農業は本市を支える重要な産業です。
しかし農業は、「重労働で大変そう」「休みがなさそう」「大変な割に稼げないのではないか」
そのようなイメージが先行し、農業従事者の高齢化問題、
後継者不足などさまざまな問題に直面しています。
一方、後継者として就農し、八代で農業を営む若者もいます。
彼らはどのように就農し、どのような想いで農業に取り組んでいるのでしょう。
未来へバトンをつなぐ彼らをのぞいて、農業の魅力に触れてみませんかー。

農業も経営を考える

橋本　修さん(35)
(昭和日進町)

農業は楽しい、面白い

イチゴの芳醇な甘い香りのするビニールハウスの中で毎日仕事をする橋本修さん。

小さい頃に農機具に乗ったり、遊んだりしているうちに興味を持ち、農業をやってみようと決意。高校卒業後、九州沖縄農業研究センターで農業技術を学び、20歳で就農。現在は妻の香奈さんと一緒に栽培をしています。

農業に触れる機会を

人と人と人がつながる農業がやりたいと「苺ちゃん祭り」を２００８年から開催。ハウスの中でイチゴ狩りと音楽やペイントのライブを行っています。橋本さんは「五感を使って楽しんで、少しでも興味を持ってほしい。そして就農したいと思ってくれるとうれしい」と期待に胸をふくらませます。

意識を変える

「農業は経営するものということを忘れずに行うことが大切」と話す橋本さん。イチゴ1個収穫するとき、1個にかかる肥料代や人件費はいくらになるのか、利益はいくらになるのかなどを意識して、作業従事者ではなく、経営者になることが収入の上昇につながると言います。

小さな一歩を積み重ねる

橋本さんは減農薬で美味しいイチゴをつくるために、生物的防除という、虫が害虫を食べていく方法を学び、ひとつの株あたりの適切な虫の量を研究して、幾度の失敗を繰り返しながら、成功しました。

「1年後や10年後、20年後の目標に向かって計画を立てて、こつこつすることが成功の秘訣」と思いを話しました。

❶鮮やかな紅色のイチゴを手にする修さん
❷自然に合わせた生活で、ストレスなく仕事ができますと話す香奈さん
❸甘さと酸味が絶妙なイチゴを持って、同じポーズで写ってくれました

転職からの挑戦

宮田　大さん(32)
(鏡町)

農業が身近にあった

農家に生まれ、小学生の時から手伝いをして「当時から農業に興味があったな」と振り返る宮田大さんは、2年前からブロッコリーを栽培しています。

一度は医療器具の卸売業に就職するも「弟が就職したことなど、さまざまなタイミングが重なり、農業をしたいという気持ちが強くなった」と話します。

地域で支え合える

収穫時期に雨が降り、ブロッコリーの成長スピードが速くなって大きく育ってしまうなど悩みがあったときには、近所の先輩農家さんにアドバイスをもらいながらこつこつ育てています。

アドバイスを受けて収穫したものを近所の人に配り、食べてもらったとき「ありがとう」や「おいしかった」の声や、喜んでくれる姿を見ることで、次はもっとおいしいものを作ろうとやりがいにつながっています。

愛を感じられる仕事

「種を植えてからずっと愛情を込めて育てていたものを収穫するときの喜びは大きい」とうれしそうに話す宮田さんは、仕事が大変だと思うことは少なく、楽しいと感じることが多いと言います。

以前の仕事ではあまり感じることが少なかった四季や家族とのつながり。ひとつひとつを大切にして、仕事に取り組んでいます。

「今後はドローンを使った作業や、トラクター無人化など最先端技術を積極的に取り入れ、作業の効率化を図って、よりおいしいものを作り、安定した収入が得られるように工夫していきたい」と笑顔で話しました。

❶愛情込めて育てたブロッコリーと息子の幹大くんを嬉しそうに眺める宮田さん
❷収穫する様子で撮れた一枚
❸おいしいブロッコリーをもっともっと作っていきたいと意気込む宮田さん

自然とともに生きる農業は、栽培する作物に合わせた生活になったり、天候に左右されたり、育てたものが虫に食べられてしまうなど厳しいこともあります。

しかし、農家の皆さんから「努力が反映されるやりがい」「自分がつくったもので近所の人やお客さんに喜んでもらえる幸福感」「自分の都合に合わせて仕事が進められる自由」など農業の魅力はたくさんあることを私たちに教えてくれます。

最先端技術を使って、昔のイメージをなくしていきたいと努力する橘さん。

子どもたちに興味をもってもらえるよう、農業に触れ合える機会をつくる橋本さん。

1日でも早く、自分の技術や品質向上のため日々奮闘している宮田さん。

彼らはふるさと・八代の農地を守り、今後も発展していくため、それぞれが努力を重ねています。

「触れてみることで農業の楽しさ、面白さがある」と皆さんは口をそろえて言います。

農業の未来は農家だけの問題ではありません。八代産の農作物を買う。農家のイベントに参加する。など一人一人が行動することで、きっと未来は変わります。

八代の大地の恵みを未来につなげられよう、農業について気にかけてみませんか。

農業を始める人を応援する制度が緩和

農業次世代人材投資事業
（旧青年就農給付金）

次世代を担う農業者となることを目指す50歳未満の人の研修期間の生活安定と就農直後の経営確立を目的とした支援事業です。

準備型
県認定の研修機関にて就農に必要な技術研修を受ける人に最長2年間、150万円を交付します。
○主な要件
①独立・自営就農、雇用就農または親元での就農を目指すこと。
②研修終了後、1年以内の就農開始と、交付期間の1.5倍（最大2年）以上、就農を継続すること。

経営開始型
独立・自営就農する認定新規就農者に対し最長5年間、年間最大150万円を交付します。
○主な要件
①独立・自営就農であること。
②本市の新規就農認定審査を受け認定されること。

新規就農認定審査会は6月、8月、10月、12月開催予定

申請手続きには時間を要するので事前に相談ください。
準備型、経営開始型ともに、交付を受けるための要件があります。
詳しくは市ホームページまたは農林水産政策課に問い合わせください。

■問合せ　農林水産政策課 ☎33-4117